

お茶女大 ○大塚洋子 袖井孝子 横浜国際福祉専門 竹田久美子
 共立女大 細江容子 群馬大 長津美代子 大修館書店 福島裕子

【目的】定年退職教員は、定年退職に伴う役割アイデンティティの変化と定年後の望ましい生き方を考える上で、豊富な情報を与える調査対象である。特定な役割への同一化はその後の役割や地位選択に影響を与える行動を動機づける主要な力となる。退職は、習慣的な行動パターンに変化を与え、個人のライフスタイルに変化をもたらすことが避けられない。老年期に生じる個人にとり最も重要な役割移行のひとつである。本研究では、生活の中心であった職業役割からの移行がその後の生活への適応にどのような影響を及ぼしているかを定年後の望ましい生き方と役割アイデンティティとの関連において調査検討する。

【方法】岩手、新潟、神奈川、愛知、兵庫、福岡の各県在勤の公立小中学校の定年退職教員のうち、1928年4月1日～1929年3月31日生まれの男性、および1933年4月1日～1934年3月31日生まれの女性、計1994票を対象として調査研究を行なった。(有効回収率71.0%)

【結果】諸変数について定年後の生き方と役割アイデンティティとの関連を検討したところ、以下の点が明らかになった。

①役割アイデンティティ：女性は家族アイデンティティに集中するのに対し男性ではあまり特定のものに集中せず各役割アイデンティティに分散している。②都市規模が大きいほど個人アイデンティティが高い。③男性では都市規模が小さいほど地域・団体アイデンティティの比率が高い。④無配偶者は家族アイデンティティが低い。⑤最長勤務校が小中学校では地域アイデンティティ、中学校では個人アイデンティティの比率が高い。⑥定年後の生き方が活動参加型の者は都市規模が小さいほど比率が高い。⑦管理職経験者に活動参加型の比率が高い。⑧無配偶者に活動参加型の比率が高い。⑨職業人アイデンティティ、団体・地域アイデンティティに活動参加型の比率が高く家族アイデンティティ、個人アイデンティティをもつ者に悠悠自適型の比率が高い。